

ブラジル人中学生の第1言語能力と第2言語能力の関係 ——作文のタスクを通して——

生田裕子*

キーワード: ブラジル人中学生, 作文, 日本語能力, 母語能力, 2言語相互依存説

要旨

本稿は日本の学校に在籍するブラジル人中学生を対象に, 作文のタスクを通して第1言語(L1)であるポルトガル語と第2言語(L2)である日本語の関係を観察したものである。

年少者のL1能力とL2能力の関係は, 文法面や音声面の能力よりも, 一般的な認知能力を必要とする読解力や文章能力においてより強いとされている。これらの結果は, Cumminsの提唱した「2言語に共通に働く基底言語能力があり, 一方の言語で身につけた能力はもう一方の言語に移行する」という「二言語相互依存説」を支持するものである。

本稿では作文能力を「産出量」「語彙の多様性」「文の複雑さ」「正確さ」「文章の構成」に下位分類し, いずれの側面において2言語間での関係が強いかを分析した。その結果「産出量」「語彙の多様性」「文章の構成」は2言語間での相関があり, 「文の複雑さ」「正確さ」は2言語間の相関が無いことがわかった。さらに, 誤用を観察した結果, 言語形式の大きく異なるポルトガル語と日本語の間でも, 文法・語彙レベルの干渉が起こることもわかった。

これらの結果から, 作文能力の中でも2言語間で相関のあった「産出量」「語彙の多様性」「文章の構成」という側面は共通基底言語能力を反映するものであること, 2言語間で相関の見られなかった「文の複雑さ」「正確さ」は個別の言語知識を反映するものであることを指摘した。そして作文能力が共通基底言語能力に支えられていることから, L1においても作文能力を伸ばしていくことがL2の作文能力の養成にも有効であると主張した。

1. はじめに

日本の学校現場における外国人児童・生徒の受け入れが本格的に始まってから約10年が経過した。この間, 外国人児童・生徒の日本語能力の発達に関する研究が行なわれてきたが, バイリンガリズムの視点から言語能力を捉えたものはまだ少ない。成長の過程にある年少者については日本語の発達だけでなく, 第1言語能力と第2言語能力を関連づけて, 言語能力を総合的に把握し

* IKUTA Yuko: 中部大学留学生別科非常勤講師。

ていく必要があると思われる。

本稿では現在日本の中学校に最も多く在籍するブラジル国籍の生徒を対象に、作文のタスクを通して、言語能力のどのような側面において2言語の関係が強いのかを観察する。これによって、2言語に共通に働く能力、個別に働く能力は何かを探ることを目的とする。

2. 先行研究

年少者のバイリンガリズムについて、まず理論的な枠組みに関する先行研究を挙げ、それから実証的な先行研究を挙げていく。

2-1. Cummins の「二言語相互依存説」

Cummins (1991a) は、音声や統語構造など表層的には異なる2言語の間にも、共有される認知言語能力が存在するとしている。そしてこの言語能力を「共通基底言語能力 (Common Underlying Proficiency)」と呼び、図1のようなモデルで表している。

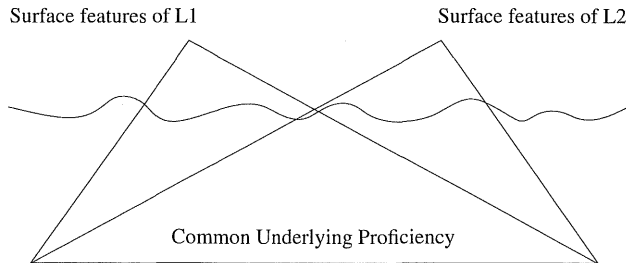


図1 共通基底言語能力のモデル (Cummins 1991a: 167)

図1の氷山の水面上の部分は第1言語(以下 L1 とする)と第2言語 (L2) の表層面(音声, 統語, 表記など)を表している。L1 と L2 は表面的には全く異なって見えるのだが、深層においては「共通基底言語能力」という共有面があり、とくに教科学習全体に関連のある認知力を必要とする言語能力については、L1 と L2 の間に依存関係が認められるという。これを「二言語相互依存説 (Interdependence Hypothesis)」という。

さらに Cummins (1991a) では、L2 の習得過程をより明らかにするために、言語能力を2つの領域に分ける必要があるとし、1つを「場面の中での言語使用 (contextualized use of language)」, もう1つを「場面からはなれた言語使用 (decontextualized use of language)」と名付けている。前者はジェスチャーなどの言語以外の助けによって、コミュニケーションが容易

に成立し、後者は言語以外の助けがないため、認知力をより必要とする言語使用である。そして「場面を離れた言語使用」においては学習者の認知的な特性が2言語に現れるという。実際にどのような言語使用においてどのような特性が2言語に共通に現れるのか、実証的な先行研究を見ていくことにする。

2-2. 二言語相互依存説の検証を行なった先行研究

移民子弟が多い欧米諸国では、Cumminsの「二言語相互依存説」をめぐる実証的な研究が数多く行なわれている。

Cummins 他(1984)はカナダ在住の日本人子弟を対象にL1(日本語)とL2(英語)の読解力と会話力の調査を行ない、それぞれの言語スキルに影響を与えているのはどのような要素であるかを明らかにするために重回帰分析を行なった。その結果「会話における文構成能力」には滞在年数の影響が最も強く、「会話スタイル」には滞在年数も関与するが子どもの性格が影響し、「読解力」には日本語の読解力と出国年齢の要因の方が強く働いた、としている。すなわち「場面からはなれた言語使用」である読解はやはりL1の能力がL2においても適用されていると考えられる。

作文能力については、Francis(2000)がメキシコの小学3・5年生69人を対象にL1(Náhuatl)とL2(スペイン語)の作文におけるバイリンガル能力を調査した。調査は途中で終わっている物語を完成させるという形で行なわれ、「ストーリーを完結させているか」「テーマに言及しているか」「キーワードを用いているか」「終わり方は適切か」「流れのよさ」「内容の詳しさ」の6点について総合点を出すことで個人のL1とL2の作文能力を数値化した。その結果、Náhuatlの作文能力とスペイン語の作文能力の間に中程度の相関が見られたとしている。この場合の作文能力の評価項目は、全体の流れや要旨、すなわち「文章能力(writing skills)」にのみ着目したものであり、文法面や語彙面などに現れる言語知識は評価の対象となっていないが、「文章能力」については2言語において相互依存していることが実証された。

Verhoeven(1994)はオランダ在住のトルコ人子弟98人について、6~8歳の間に3回にわたりL1(トルコ語)とL2(オランダ語)の読解力テストと口頭テストによる追跡調査を実施した。そして読解力と会話力をさらに下位分類したスキルについて2言語間の関係を因果分析によって分析し、L1からL2への影響の強い、すなわち2言語間で相互依存する言語使用(interactive domain)として「読解力」「語彙力」「会話の流暢さ」を挙げている。逆に2言語間で依存しない言語使用(autonomous domain)は「形態・統語レベルの能力」であったとしている。

日本では国立国語研究所が外国人児童・生徒(ブラジル、ペルー、中国、ベトナム)123人を対象にL1とL2の能力について調査を行ない、Okazaki(1999)が読解力について分析している。その結果、L1とL2の間には相関関係がみとめられ、特にL1の読解力が高いほどL2と

の相関が強くなるという傾向が見られたという。

これらの先行研究から、「読解力」「文章能力」「語彙力」「会話の流暢さ」については L1 で身につけたものが L2 で生かされるという「二言語相互依存説」を支持する結果が出ている。これに対し「形態・統語レベルの能力」については 2 言語間で相互依存しないことが示されている。「読解力」「文章能力」はまさに文脈の助けを借りない「場面からはなれた言語使用」であり、Cummins のいう「共通基底言語能力」が L1 と L2 において共通に働いていると言える。「会話の流暢さ」は個人の対人スタイルが 2 言語に共通に反映していると思われる。「統語・形態レベル」で相互依存しないのは統語や形態が個々の言語の規則を反映するもので他言語に適用しにくいからであると考えられる。しかし「語彙力」が個々の言語知識に関わる側面であるにも関わらず「統語・形態レベル」とは異なり 2 言語で似通った能力を発揮するのは興味深い点である。

次に、年少者の作文における 2 言語間のトランスファーを観察した先行研究を挙げる。

Harley・Lou King (1989) はカナダのイマージョンプログラムに参加する小学 6 年生 69 人を対象に L2 (フランス語)の作文における動詞使用の実態を調査した。動詞における誤用を手がかりに、L1 (英語)から L2 へのトランスファーを観察し「L1 の意味情報を両言語において用いている」という仮説の検証を試みた。その結果、他動詞にも前置詞を用いるなど、英語からフランス語へのトランスファーが見られたとしている。

Edelsky (1982) は米国在住の 7~9 歳の小学生 27 人を対象に L1 (スペイン語)と L2 (英語)の作文調査を行ない、トランスファーの視点から 2 言語の作文を分析している。その結果、語の区切り方・綴り・個人のスタイル(1 文の長さなど)において L1 から L2 への適用が見られ、統語面・コード切り替え・字体においては L1 から L2 への適用が見られなかったとしている。さらに L1 で作文を書く際のストラテジーの適用も L2 の作文を書く過程で観察されたとしている。

これらの調査では統計的な分析は行っていないが、動詞の意味解釈・表記・個人のスタイル・作文を書く際のストラテジーにはトランスファーが見られたということである。しかし Harley, Edelsky どちらの調査も英語—フランス語など表記や言語形式の比較的近い言語を組み合わせて比較しており、一方の言語が他方の言語に影響を与えることは想像しやすい。本稿では、日本語とポルトガル語のように表記や言語形式が異なる 2 言語でもこのような影響があるのかどうかを観察する。

2-3. 研究課題

前節の先行研究では、作文というタスクにおいて 2 言語間の相関関係が強いことが証明されている。しかしここでは「要旨・文章の流れ」が評価の観点であった。本稿では「文章能力」だけでなく「言語知識」も含めたより多角的な観点を設定し、作文能力を分析することにする。また、誤用の中で一方の言語から他方の言語への影響があるかどうかを観察する。よって以下の 2 点を

研究課題とする。

- (1) 作文において2言語間で相互依存するのはどのような側面か。
- (2) 日本語とポルトガル語の作文において、2言語間の干渉は見られるか。

3. 研究の方法

3-1. インフォーマント

インフォーマントは、愛知県の公立中学校16校に在籍する日系ブラジル人生徒55人である。性別内訳は男子生徒が27人、女子生徒が28人である。学年は中学1年生(12~13歳)が18人、2年生(13~14歳)が12人、3年生(14~15歳)が25人である。滞在年数は全員が1年以上で、最長9年9ヵ月である(表1)。出国年齢は6歳から13歳にわたっている(表2)。

表1 インフォーマントの滞在年数の内訳 (N=55)

滞在年数	1年~	2年~	3年~	4年~	5年~	6年~	7年~	8年~	9年~	合計
人数	5	10	14	12	4	3	4	1	2	55

表2 インフォーマントの出国年齢の内訳 (N=55)

出国年齢	6歳~	7歳~	8歳~	9歳~	10歳~	11歳~	12歳~	13歳~	合計
人数	3	4	5	11	10	9	12	1	55

55人のインフォーマントのうち、4人(滞在5年が1人、6年が2人、9年が1人)を除くすべての生徒が週2~14時間の日本語の取り出し授業に参加しており、その他の時間は日本人生徒とともに教科学習を行っている。

3-2. データ収集の方法

作文の課題は「都会の生活と田舎の生活のどちらがよいと思いますか。それはなぜですか」というもので、日常会話と区別するために、身近な話題から若干離れた事柄について客観的に説明させることをねらった。作文を書く際、字数と時間の制限は設けていない。苦手な言語から書き始めることを強要すると、生徒の作文作成に対する意欲を削いでしまうことがあるため、2言語のどちらから書くかは自由とした。また辞書の使用を認め、辞書で調べた語にはアンダーラインを引くよう指示した。

3-3. 分析の方法

本稿は、作文能力を「言語知識」と「文章能力」から成るものと捉えた Cumming (1989) に

ならいこの2つの側面を観察する。Wolfe-Quintero 他(1998)によって提示された下記の(A)~(D)の作文能力の発達指標が「言語知識」にあたるものであり、「文章能力」として(E)を取り上げる。

- (A) 産出量(日本語: 文節数, ポルトガル語: 語数)
- (B) 語彙の多様性(延べ語数×2の平方根あたりの異なり語数¹⁾)
- (C) 文の複雑さ(主節あたりの従属節の数)
- (D) 誤用の頻度(節あたりの誤用数)
- (E) 文章全体の構成(2人の母語話者による4段階評価)

(B)の「語彙の多様性」とは、作文の中でどれくらい様々な語を用いることができたかを測るものである。この場合、日本語の助詞やポルトガル語の前置詞などの機能語も含む。従来「語の多様性」は「延べ語数あたりの異なり語数」で測定されることが多かったが、この方法では作文が長いほど必然的に同じ語の繰り返しも多く語の多様性が低いという結果になり、語の多様性が作文の長さに左右されることになる。しかし Wolfe-Quintero 他(1998)の「延べ語数×2の平方根あたりの異なり語数」によれば、このような作文の長さの影響を捨象することができる。なお表現意図不明な語、辞書を引いた語は除いて数えた。

(C)の「文の複雑さ」については、「T-unit²あたりの述語相当句」など、T-unitを測定単位として用いられることが多い(Wolfe-Quintero 他 1998, 田丸・吉岡 1994)。本稿でも「主節あたりの従属節の数」によって文の複雑さを測定する。ただし、形は並列節でも意味としては従属節となるもの(「田舎はたいくつできらいです」のような理由を表す「一て形」)や、形は従属節でも意味は並列節となるもの(「はっきりは言えませんが、都会の方がいいと思います」のような並列を表す「～が」など)は、意味に合わせて従属節あるいは並列節と判断することにした。例えば「都会はとつぜんおそってくる強盗とかいて危ないから、夜はいつもうちにいた」という文は、「とつぜんおそってくる」「強盗とかいて」「危ないから」という3つの従属節を含む1つの主節であり、文の複雑さは $3+1=3$ となる。単文・並列節は主節として数えないので、作文全体における従属節の割合ではなく、主節についての節の深さを測ることになる。ポルトガル語も同様に「主節あたりの従属節の数」を文の複雑さを表す指標とする。

(D)の「誤用の頻度」における誤用は「文法レベル」「談話レベル」「語彙レベル」「表記レベル」の4つのレベルのものを観察した。日本語作文の誤用の判定は筆者ともう1人の母語話者で行なった。両者とも日本語教師であり、誤用の認定の一致度は95.3%であった。ポルトガル語作文の誤用の認定も2人の母語話者によって行なった。1人は日本の大学の学生、1人は日本の小

¹ 延べ語数が67で異なり語数が54の場合、語彙の多様性は $54/\sqrt{67 \times 2} = 4.66$ となる。

² T-unitとは「付属、または埋め込まれた従属節を含む主節」であり、「①動詞の終止形、②形容詞の終止形、③名詞+だ」などがその例とされる(田丸・吉岡 1994: 91)。

学校のポルトガル語指導員である。誤用の認定の一致度は93.9%であり、2者で一致したもののみ誤用として数えた。

さらに誤用については、L1からL2への影響、そしてL2からL1への影響、すなわち2言語間の干渉によって起きたと思われる例を挙げていく。

(E)の「文章全体の構成」は言語知識というよりも「作文をいかにまとめるか」という読みやすさにかかわるもので、Cumming (1989)が作文の良し悪しの決め手になるとした文章の構成や内容をつかさどる「文章能力 (writing expertise)」と考える。日本語・ポルトガル語ともに2人の母語話者に文章全体の流れの追いやすさ、主旨のつかみやすさを「1: 大変わかりやすい」「2: わかりやすい」「3: わかりにくい」「4: 大変わかりにくい」の4段階で評価してもらった。評価の際、意味の解釈に支障をきたさないのであれば誤用は無視するように依頼した。日本語作文の判定は誤用の判定者とは異なる2者によって行なった。2者の判定の相関は $r = 0.60$ 、ポルトガル語作文は $r = 0.59$ であり、2者の評価の平均を得点とした。

4. 分 析

4-1. 日本語能力とポルトガル語能力の相関関係

L1であるポルトガル語とL2である日本語の相関関係が強いのは何であるかを見ていく。この場合、例えば滞在年数が1~3年の生徒であればポルトガル語では産出量が多く日本語では少ない。逆に滞在年数が8年以上の生徒であれば日本語では長く、ポルトガル語では短い作文を書く。しかし、2言語間の相関を見るためには、このような要因を取り除き「もしこれらの生徒が滞在年数が全員同じであれば、一般的に2言語間の相関はどれくらい強いのか」という視点に立たなければ、個人個人の特徴を公平に比較することはできない。よって統計の手法として、滞在年数にかかわらずL1とL2で同じ振舞いをする項目は何であるかを観察するために、滞在年数の影響を取り除いた偏相関係数をもとめる。結果を表3に示し、相関関係のある数値は太文字で表す。

表3 5つの評価項目における日本語とポルトガル語の偏相関係数 r (N = 55)

	産出量	語彙の多様性	文の複雑さ	誤用の頻度	文章の構成
日本語とポルトガル語の偏相関係数 r	0.56	0.21	-0.08	-0.02	0.32

- 0.0 ≤ |r| ≤ 0.2 ほとんど相関がない
- 0.2 ≤ |r| ≤ 0.4 弱い相関がある
- 0.4 ≤ |r| ≤ 0.7 中程度の相関がある
- 0.7 ≤ |r| ≤ 1.0 強い相関がある

日本語とポルトガル語の間でもっとも相関関係が強いのが「産出量」で、中程度の相関($r = 0.56$)である。「文章の構成」と「語彙の多様性」についても弱いものではあるが、それぞ

れ相関が見られる ($r=0.32$, $r=0.21$). よって L1 で長い作文を書く生徒は L2 においても長い作文を書き, L1 で多様性に富んだ語彙を用いる生徒は L2 においても, また L1 において流れの追いやすい作文を書く生徒は L2 においても同様の作文を書いているということである. しかし「文の複雑さ」と「誤用の頻度」にはこのような相関が見られなかった.

4-2. 誤用に見られる 2 言語間の影響

4-1. で「誤用の頻度」には 2 言語間の相関が無いことを示したが, 個々の作文の誤用を観察すると, L1 から L2, そして L2 から L1 への影響が見られた. 以下に事例を挙げていくことにする.

4-2-1. L1 から L2 への影響

4-2-1-1. 表記に関するもの

ポルトガル語の表記の方法を日本語作文に用いた例は, 例 (1)~(3) のような句読点の使い方がある.

- (1) 都会: 学校, 友だち, しごと, あそび, etc...
いなか: 休みだけ (BL3³ / 滞在年数 1 年 8 ヶ月 / 出国年齢 12 歳 10 ヶ月)
- (2) たとえば: しょぴんご, コンビニ, Restaurant, ゲームせんた, じすこ.
(BL22 / 滞在年数 3 年 3 ヶ月 / 出国年齢 12 歳 6 ヶ月)
- (3) 土曜日と日曜日は僕の家族はバーベキューをやります, とても楽しいです.
(BL8 / 滞在年数 2 年 2 ヶ月 / 出国年齢 12 歳 1 ヶ月)

例 (1)(2) はポルトガル語で例を挙げるときの「:」を日本語に用いたものだが, 日本語の文としては適切ではない. また例 (3) はポルトガル語で句点によって 2 文をつなげるやり方だが, 日本語では「て形」などにするのが適当である.

4-2-1-2. 語彙に関するもの

例 (4)(5) はポルトガル語の語をそのまま日本語に直訳しておきた誤用である.

- (4) でも住むが少しいです. (BL5 / 滞在年数 1 年 9 ヶ月 / 出国年齢 11 歳 11 ヶ月)
- (5) 都会はぜんぶ近い (BL36 / 滞在年数 4 年 6 ヶ月 / 出国年齢 8 歳 6 ヶ月, BL38 / 滞在年数 4 年 9 ヶ月 / 出国年齢 9 歳 4 ヶ月)

例 (4) については, ポルトガル語に「pouco bem (まあまあ)」という表現がある(この表現も書きことばとしてはあまり適切ではないが, 誤用ではない)のを, 「pouco (少し)」「bem (いい)」とそのまま直訳したと思われる. しかし日本語では「まあまあ」とするのが適当であろう.

³ BL3 とは, Brazilian Learner と 55 人の中の通し番号を指す.

例(5)についても、ポルトガル語は「何でも近くにある」と言うために「ter tudo por perto (すべてのものを近くにもっている)」を「全部近い」となったと考えられるが、やはり日本語では適切とは言えず、「何でも近い(近くにある)」とするのが適当であろう。

例(6)~(8)はいずれもポルトガル語で思い浮かべた語を日本語の辞書で探した結果おきた誤用である。

(6) いなかの生活のばいはおたやかとせいおんとわごうとか、あるからいい。

(BL4 / 滞在年数1年8ヵ月 / 出国年齢12歳4ヵ月)

(7) いなかはずごく平安。(BL7 / 滞在年数2年0ヵ月 / 出国年齢12歳0ヵ月)

(8) いなかは美しい一見があります。(BL8 / 滞在年数2年2ヵ月 / 来日年齢12歳1ヵ月)

例(6)の「おたやか」は「calmaria (平穏さ)」、 「せいおん」は「tranquilidade (静寂)」、 「わごう」は「paz (平和)」の訳の中から、また例(7)の「平安」は「sossego (平穏さ)」から、例(8)の「一見」は「a vista (風景)」の訳の中から選んだものである。いずれも抽象度の高い語でありながらインフォーマントの滞在年数が短いため、辞書に頼らざるを得なかったが、適切な語を選ぶことができなかった。

しかし、同じインフォーマントでもポルトガル語作文ではこれらの語を適切に用いている例もある。例(6)′(8)′の下線部は、例(6)(8)と同じ内容をポルトガル語で書いたものである。

(6)′ Por outro lado o campo, pois você encontra a calmaria, a tranquilidade e a paz que você não tem na cidade.

(訳: もう一方ではいなかがいいです。 なぜなら都会にはない落ち着き, 静寂, 平和があるからです)

(BL4 / 滞在年数1年8ヵ月 / 出国年齢12歳4ヵ月)

(8)′ A vista do campo e lindo, montanhas e rios compridos, adoro campo.

(訳: 田舎の景色は美しく, 山と長い川もあり, 田舎が大好きです。)

(BL8 / 滞在年数2年2ヵ月 / 出国年齢12歳1ヵ月)

この(6)~(8)の作文を書いたインフォーマント BL4, BL7, BL8はいずれも滞在1~3年の生徒である。これらの生徒はポルトガル語で書いた内容をそのまま日本語でも書こうとしたため、日本語の語の選択をあやまったことになる。

ただし、例(9)(9)′は同じ滞在1~3年の生徒による作文であるが、ポルトガル語と同じ内容の日本語作文を書くことを避け、日本語では確かな語彙だけを用いてまとめるというストラテジーを用いることによって、語彙の誤用がおきなかった例である。

(9) 私, 都会が大好きです。

都会はとっても楽しいし, 人が大きくて, 行くところがあるし, 友だちも大いです。

私は, 都会にうまれたから都会の方がいいです。

私、うるさいところがすきから都会が大好きです。

(BL33 / 滞在年数 4 年 2 ヶ月 / 出国年齢 10 歳 4 ヶ月)

(9) ' Eu prefiro a vida na cidade porque a vida na cidade é mas ajitada e tambem tem muitos gatinhos.

Eu gosto do campo mas é quieto por isso eu prefiro a cidade.

A vida no campo deve ser legal mas como eu nasci e fui criada na cidade é assim que eu quero viver !

Eu queria esprimentar viver no campo mas eu acho que não ia dar certo porque eu já me acostumei na cidade que tem de tudo.

O campo é legal e interessante porque lá você vê muitas coisas que você não vê na cidade, mas na cidade tambem tem coisas interessante como: play center, posto, game e etc.

A vida no campo deve ser legal para quem nasceu e foi criada lá, mas para a gente aqui da cidade e meio chato pois é muito quieto e não tem nenhum movimento.

(訳: 私は都会の生活の方がいいです。

なぜなら、都会の生活はもっと賑やかで、たくさん男の子がいるからです。私は田舎がすきですが、田舎は静かなので、都会の方がいいです。

田舎の生活はいいにちがいありませんが、私は都会で生まれて育ったので、都会で生活したいです。田舎の生活も経験してみたいですが、はっきりしません。なぜなら、私は何でもある都会に慣れているからです。田舎はいいし、おもしろいです。なぜなら田舎では見られないものがたくさんあるからです。でも都会にも面白いものがたくさんあります。ゲームセンター、ガソリンスタンドなどです。田舎の生活はそこで生まれて育った人にはいいと思いますが、都会の人にはちょっと退屈だと思います。なぜならとても静かで活動がぜんぜんないからです。)

(BL33 / 滞在年数 4 年 2 ヶ月 / 出国年齢 10 歳 4 ヶ月)

作文を書く際の L1 から L2 への影響については、石橋 (1997) が中国人留学生に中国語の作文に次いで日本語の作文を書くというタスクによって誤用を観察している。石橋はここで、翻訳によってねじれや接続の誤用は増加しなかったものの、語彙の選択や表現上の誤用は増加する傾向があったと報告している。本稿では学習者が日本語・ポルトガル語いずれの作文から始めるかを自由としたため、同様の統計処理は行なえないが、例 (6)~(8) の 3 人のインフォーマントはいずれもポルトガル語作文から書いており、その結果 L1 の影響により語彙の誤用が起きた例だと考えられる。よってここでも、語彙の使用に関しては L1 が L2 の語彙使用にマイナスの影響を及ぼすケースがみとめられた。ただし、L1 の内容をそのまま L2 に持ち込まないで正しく書

くというストラテジーも観察された。

4-2-2. L2 から L1 への影響

4-2-2-1. 語彙に関するもの

例(10)~(13)は日本語で思い浮かべたと思われる語をそのままポルトガル語に訳しておこった誤用である。

(10) e no campo só tem verdes e não tem nada perto

(訳: そしていなかには緑しかなくて、近くには何もありません)

(BL12 / 滞在年数2年6ヵ月 / 出国年齢12歳0ヵ月)

下線部の「verdes」は「緑」という意味の語だが「bosques (森林)」が適当である。

(11) Eu prefiro a vida na cidade porque é mais engraçado

(訳: 私は都会の生活の方が好きです。もっとおもしろいからです)

(BL28 / 滞在年数3年10ヵ月 / 出国年齢11歳6ヵ月)

例(11)の下線部「engraçado」は「divertida (おもしろい / 楽しい)」の方が適当である。「engraçado」はむしろ「こっけいな」という意味になるからである。より広い意味をもつ日本語の「おもしろい」に相当するであろうと思われるポルトガル語の語を、そのまま当てはめた結果起きた誤用である。

(12) E muitas naturezas e faz bem para o corpo.

(訳: (いなかには)たくさんの自然があつて、体にいいです。)

(BL36 / 滞在年数4年6ヵ月 / 出国年齢8歳6ヵ月)

(13) no campo o ar é limpo (訳: いなかは空気がきれいです)

(BL42 / 滞在年数2年0ヵ月 + 3年3ヵ月 = 5年3ヵ月 / 出国年齢3歳0ヵ月, 9歳11ヵ月)⁴

例(12)の下線部「naturezas (自然であること)」は「belezas naturais (自然の美しいもの)」の方が適当である。また下線部「o corpo」は「a saúde (健康)」が適当である。ポルトガル語では「体にいい」という言い方ではなく「健康にいい」となる。例(13)のように「空気がきれい」というためには、「limpo (きれい)」ではなく「puro (汚れていない)」を用いる。いずれも日本語の「自然がある」「体にいい」「空気がきれい」という表現の中にある語をポルトガル語に直訳して起こった語彙的コロケーションに関わる誤用である。

⁴ インフォーマント55人のうち4人は途中で一時帰国している。この場合、滞在年数は1回目と2回目の滞在年数を合わせて計算した。出国年齢については、いずれの生徒も2回目の滞在の方が長いので、2回目の出国時の年齢とした。

4-2-2-2. 文法に関するもの

例(14)は動詞を用いるべき構文が、名詞文あるいは形容詞文になっている例である。

(14) na cidade é muito barulhento. (訳: 都会はうるさい。)

(BL42 / 滞在年数 2年0ヵ月 + 3年3ヵ月 = 5年3ヵ月 / 出国年齢 3歳0ヵ月, 9歳11ヵ月)

例(14)は本来「na cidade há muito barulho (町にはたくさんの騒音がある)」と存在動詞「há」を用いるべきである。しかし日本語のように「都会はうるさい」という形容詞文では表現されない。よって(14)は日本語の「AはBだ」という名詞文あるいは形容詞文をそのままのポルトガル語に置き換え、構造的な誤用が起きたものである。

4-2-3. スタイルの類似性

ここでは L1 と L2 のいずれが原因か判断はできず、誤用とも言えるものではないが、個人の書き方の特徴が 2 言語に共通して見られる例を示す。

例(15)(16)は、日本語においてもポルトガル語においても 1 文が長くなってしまった例である。いずれも誤用ではないが、読みづらく適切な書き方とも言えない。

(15) そしてしずかだしどろほがないからじぶんのはりたいこともできるしかぞくてたのしくくらせるからまいにちたのしくせいかつできます。

(BL32 / 滞在年数 4年0ヵ月 / 出国年齢 10歳4ヵ月)

(15)' na cidade eu posso ir para iscola posso irna casa das minha amiga etambem irpasiar lonje, compra uquivocê que com pra ropa e trabalhar para ganhar dinheiro para sutentar sua familia e tambem para cudar da tuasaudi

(訳: 都会の生活です都会では学校に行けるし、友だちの家に行けるし、遠くに行けるし、好きなものが買えるし、服も買えるし、家族を守るためと健康を考えるためのお金を稼ぐために働けます。)

(BL32 / 滞在年数 4年0ヵ月 / 出国年齢 10歳4ヵ月)

(16) もしいなかから都会へきたら人にだまされたりしやすいのでそういうことにならないようにさいしょから都会にすんでそうゆう人間にであって、いろんなしゆるいの人間がいるってことをおぼえておくことがだいじだからです。

(BL43 / 滞在年数 5年3ヵ月 / 出国年齢 9歳3ヵ月)

(16)' Quando uma pessoa que mora no campo for vim para a idade grande é bem provavel que uma pessoa pode enganar ela, e para não acomtercer isso eu prefiro morar já na cidade grande.

(訳: いなかに住んでいた人が都会に出てきた時、誰かがその人をだますかもしれないです。そして、そのようなことに慣れるために僕は都会に住んだ方がいいと思いま

す。)

(BL43 / 滞在年数 5 年 3 ヶ月 / 出国年齢 9 歳 3 ヶ月)

このように Edelsky (1982) 同様、日本語とポルトガル語においても「文の長さ」というスタイルは 2 言語に共通してみとめられた。

4-2-4. ま と め

以上の観察から L1 から L2 だけではなく、L2 から L1 への影響が原因で起こる誤用もあることがわかった。この場合、滞在年数が比較的短くても L2 から L1 へ影響を与える例もあった。110 作文の中で、明らかに一方の言語からの影響が原因だと思われる誤用は、例 (1)~(16) がすべてであり頻度は高くない。しかし、日本語・ポルトガル語のように言語形式・表記が大きくなっても、表記・語彙・構文と様々なレベルに互って互いに影響し合い、誤用が起り得ることがわかった。

5. 結果と考察

ここで 2 つの研究課題をもう一度挙げ、それぞれについての結論を示す。

(1) 作文において 2 言語間で相互依存するのはどのような側面か。

本章では、日本語とポルトガル語の作文の相関関係を「産出量」「語彙の多様性」「文の複雑さ」「誤用の頻度」「文章の構成」という 5 つの観点から分析した。その結果「産出量」「語彙の多様性」「文章の構成」は 2 言語間で相関関係があり、「文の複雑さ」「誤用の頻度」にはないことがわかった。

2 言語間で相関関係が見られた「産出量」「語彙の多様性」「文章の構成」については、各インフォーマントが L1 と L2 で共通のふるまいをしている傾向があるということであり、これらの側面には Cummins のいう「共通基底言語能力」が強く働いており、2 言語間で能力が相互依存していると言える。逆に 2 言語間で相関の見られなかった「文の複雑さ」「誤用の頻度」は、2 言語でまったく異なるふるまいをする傾向があり、2 言語間で相互依存しているとは言えない。これは「文の複雑さ」「(文法・語彙・表記などの)正確さ」は個々の言語特有の知識に関するものであるからだと考えられる。

結果を先行研究と比較すると「文章の構成」は Francis (2000) と同様、「語彙の多様性」も口頭テストによる Verhoeven (1994) と同様、2 言語の間の相関が見られたということになる。さらに「文の複雑さ」と「誤用の頻度」において 2 言語間の相関が見られなかったのは、Verhoeven (1994) において「統語・形態レベル」について観察したものと同じであった。

この結果から Cummins (1991a) の提示した図 1 の「共通基底言語能力」は図 2 のように、言語運用の側面によってその面積が異なるという連続性のあるものだと考えることができる。

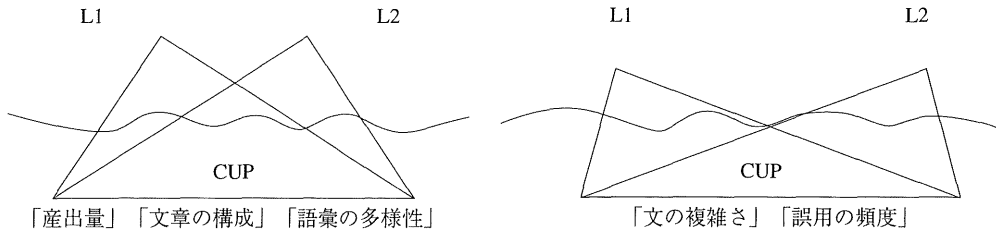


図 2 Cummins (1991a) の「共通基底言語能力」モデルの修正

すなわち本調査で取り上げた側面について言えば、左図のように「産出量」などの側面には共通基底言語能力 (CUP) がより大きく働き、L1 と L2 の表層面にも共通点が現れやすい。これに対して、右図のように「文の複雑さ」などの側面は共通基底言語能力の影響がより小さいため、L1 と L2 の表層面にも共通点が現れにくい。

このように作文能力という 1 つの言語スキルを細分化して観察することにより、作文能力は共通基底言語能力を強く反映した 2 言語で相互依存する側面と、2 言語で相互依存しない個々の言語知識から成っていることがわかった。

(2) 日本語とポルトガル語の作文において、2 言語間の干渉は見られるか。

作文における誤用を観察したところ、日本語・ポルトガル語という言語形式・表記の異なる 2 言語間でも、表記・語彙・構文と様々なレベルに互って L1 から L2, L2 から L1 の両方向からの影響が見られ、誤用となって現れることがわかった。さらに 1 文を長く書くなど、スタイルも 2 言語に共通に現れ得ること、2 言語の言語能力に差がある場合は、優位な言語における作文の内容をそのまま他方の言語で書こうとすることにより誤用が起こる場合と、誤用を避けるためにできる範囲で作文をまとめるストラテジーが働く場合があることもわかった。

6. おわりに

「場面からはなれた言語運用」であり、認知力を必要とする作文というタスクを通して L1 と L2 の関係を観察したところ、L1 と L2 の相関関係のある側面があることがわかった。2 言語間の干渉の例がいくつか見られたものの、作文能力が L1 と L2 で相互依存していることを踏まえ

ると、滞在年数の浅い生徒は特に、日本語だけでなくポルトガル語の作文能力も総合的に養成することが、「文章を書く」という学習全般に不可欠なスキルを育てることになると考える。

謝 辞

本調査にご協力くださった中学校の先生方と生徒の皆様に記して感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 石橋玲子 (1997) 「第1言語使用が第2言語の作文に及ぼす影響——全体的誤用の観点から」『日本語教育』95: 1-12.
- 田丸淑子・吉岡 薫 (1994) 「日本語発話資料分析の単位をめぐる問題——第二言語習得過程観察の立場から」『The Language Program of the International University of Japan Working Papers』5: 84-100.
- Cumming, A. 1989. Writing expertise and second language proficiency. *Language Learning* 39: 81-141.
- Cummins, J. 1991a. Language development and academic learning. In Matavi, L. & Dequette, G. (eds.), *Language, Culture and Cognition: A Collection of Studies in First and Second Language Acquisition*, 161-75, Multilingual Matters.
- . 1991b. Interdependence of first- and second-language proficiency. In Bialystok, E. (ed.), *Language Processing in Bilingual Children*, 70-89. Cambridge University Press.
- Cummins, J., Swain, M., Nakajima, K., Handscombe, J., Green, D., and Rean, C. 1984. Linguistic interdependence among Japanese and Vietnamese immigrant students. In Rivera, C. (ed.), *Communicate Competence Approaches to Language Proficiency Assessment: Research and Application*, 60-81. Multilingual Matters.
- Edelsky, C. 1982. Writing in a bilingual program: The relation of L1 and L2 texts. *TESOL Quarterly* 16: 211-28.
- Francis, N. 2000. The shared conceptual system and language processing in bilingual children: Findings from literacy assessment in Spanish and Náhuatl. *Applied Linguistics*, 21 / 2: 170-204.
- Harley, B. and Lou King, M. 1989. Verb lexis in the written composition of young L2 learners. *Studies in Second Language Acquisition* 11: 415-39.
- Okazaki, T. 1999. Interrelationship between children's L2 acquisition, L1 maintenance and interdependence. Paper presented at the 12th World Congress of the International Association of Applied Linguistics held at Waseda University, Tokyo.
- Verhoeven, L. T. 1994. Transfer in bilingual development: The linguistic interdependence hypothesis revisited. *Language Learning*, 44: 3, 381-415.
- Wolfe-Quintero, K., Inagaki, J., and Kim, H. 1998. *Second Language Development in Writing: Measures of Fluency, Accuracy & Complexity*. University of Hawaii Press.